

（１）探査

■ 「ゼロから掘ろう！」「おもろいやないか」 豪州の大草原、ヤマを求める

真っ青な空の下、見渡す限り草原が広がる。オーストラリア（豪州）東部、クイーンズランド州（QLD州）のミモザ鉱区は、州都ブリスベーンから飛行機と車を乗り継ぎ、2時間の場所にある。

2012年10月、三井松島産業常務の天野常雄（57）＝現社長＝がこの地に立った。ボーリング調査で地層から引き抜かれた石に見入り、思わず指を伸ばした。

「黒いな。きれいな色じゃないか」

黒く輝く石炭だった。

「いい色ですね。層の厚みはどれくらいでしょうかね」。隣にいた海外業務部長の萩野谷（はぎのや）陽一（57）＝現常務＝が、大草原を一望した。

「いつか日本にこの石炭を持って帰るぞ」

未開発の炭層を見つけ、鉱山として開発する。そして、新たなエネルギー資源として日本に供給する。そんな未来図に、天野の胸は高鳴った。

三井松島産業が豪州において、石炭探査プロジェクトに乗り出したきっかけは、10年秋だった。

東京支社にいた天野と萩野谷の元を、ブリスベーンに本社を置く石炭事業会社スクエアグループの役員が訪れた。

三井松島産業は、豪州東部、ニューサウスウェールズ州（NSW州）にあるリデル炭鉱で石炭を掘り、新日鉄住金など国内の鉄鋼会社や、火力発電所を持つ電力会社に販売する。

豪州事業を通じ、スクエア社とは普段からよく情報交換していた。

役員はこう持ちかけた。「石炭開発が期待できる候補地がいくつかあるんです。どうでしょう。探査を一緒にやってみませんか」

石炭は日本国内でほとんど生産されなくなったが、電気や鉄をつくるのに欠かせない。日本は国内消費の99%を輸入に頼り、中国に次ぐ世界2位（現3位）の石炭輸入国だった。輸入量は年約1億9千万トン、大型タンカー3千隻分にあたる。その8割を豪州とインドネシアに依存する。

そんな日本の石炭輸入は、厳しい時代を迎えていた。世界的な需要拡大のためだった。

急速に経済発展を続ける中国が09年ごろ、石炭輸出国から輸入国に変わった。需給のバランスが大きく崩れかけた。需要増による資源ブームを期待し、大量のマネーが世界中の炭鉱、特に操業中や操業間近の炭鉱に流れ込んだ。

石炭や石油、鉄鉱石などの資源をめぐるには「権益」が重要な意味を持つ。出資や融資を通じて、開発に関与し、その出資比率などに応じて、産出された資源を引き取ったり、配当金を受け取る権利のことだ。

石炭の場合、すでに開発された炭山の権益を求め、数百億円規模で投資する。資金回収は、うまくいっても数十年かかる。長期の投資資金や経営能力を必要とする。

だが、需要拡大に端を発し、資源バブルといってよい状況になった。チャイナマネーなどが炭山の短期転売も視野に、すでに石炭を産出している「動いているヤマ」に流れ込んだ。価格は億円単位でつり上がっていった。

三井松島産業も、将来を見据えれば、リデルとは別の炭鉱を手持ちに加える必要があった。しかし、数百億円、数千億円の投資が必要な大きな炭鉱は手が届きにくい。バブルの様相を呈す中では、慌てて買って、高値づかみをするリスクもある。

三井松島産業は1913（大正2）年、長崎県西海市の離島に誕生した「松島炭鉱」を前身とする。同じ長崎で操業した池島炭鉱が2001（平成13）年に閉山するまで88年間にわたり、良質の石炭を供給し、日本のエネルギーを支えてきた。

「石炭を祖業とするわが社には、ヤマを目利きできる技術者がいる。石炭を扱う他社と同じやり方ではなく、探査でいいヤマを発掘できないか」

既存の炭鉱の権益を確保するのではなく、「ゼロ」からヤマを掘ろう。

天野は決意した。

× × ×

ただ、探査には金が必要だ。1回のボーリング調査だけで約1千万円かかる。石炭層の分布を知るには何十カ所もボーリングをしなければならないが、良質な石炭が出なければ、調査費は無駄に終わる。

スクエア社の提案に乗って、仮に有望な炭層が出なかった場合、10億円の損失が見込まれた。

「他の役員の承認が得られるだろうか」

天野はトップ判断に賭けた。社長の串間新一郎（65）＝現会長＝に、直接相談した。

天野はリスクも説明した。串間は最後まで静かに聞き、ニヤッと笑った。

「おもろいやないか」

串間は宮崎県出身だが、大阪外国語大（現・大阪大）で学び、外国語に加えて関西弁を身に付けた。大阪出身の天野と話すと、ふと関西弁が出る。

串間の反応を見て、天野の顔も緩んだ。

天野は川鉄商事（現・JFE商事）を経て、三井松島産業の役員に就いた。石炭の魅力を人一倍感じていた。

川鉄時代、天野は石炭販売を担当した。石炭は数億年から数千万年前に、植物が湖や沼の底に堆積し、地中の熱と圧力を受け、炭素が濃縮されてできる。

「恐竜より大昔の植物が、自分たちが商売する石炭になっているんだ」。石炭に触れると地球の鼓動を感じた。そんな気がした。

申間の内諾を得た上で、探査を諮る取締役会が開かれた。説明に海外業務を担当する萩野谷が立った。

萩野谷は、世界のマーケットの状況を説明した。メーカーの研究開発（R&D）の事例を紹介し、「メーカーはコンスタントに研究開発に投資しています。その中の一つが大きく育つ可能性もあるんです」と訴えた。

天野も言った。「われわれにとって探査は、メーカーのR&Dに通じる。当たらないと投資は飛ぶかもしれませんが…。それでも、われわれの能力や技術力を使って次の石炭層を確保しましょう」

反対意見は出なかった。終了後、役員の一部がこう口にした。

「いやあ、久々におもしろいもんが出てきたな。わくわくするな」

× × ×

11年5月、スクエア社と契約を結び、探査が始まった。

候補地は5つだった。このうちまずボーリング調査に着手したのが、QLD州のポイン鉱区だった。

萩野谷がスクエア社との窓口となった。スクエア社が毎月まとめるレポートに目を通し、事業の進捗（しんちよく）を確認した。

天野や萩野谷は気をもんだ。黒い石は出てくるが、「石炭」と言えるものではなかったからだ。

石炭の品質は地中での炭素の濃縮度合いによって決まる。結局、ポイン鉱区は炭鉱開発に向かず、同年8月、この地を断念した。

初回の探査でいきなり有望地が見つかるとは思っていなかった。それでも、このまま有望地が見つからなければー。

「次の鉱区に期待しよう」。天野は自分に言い聞かせた。

次の候補地は、同じQLD州内のミモザ鉱区だった。10カ所、20カ所とボーリングは続いた。

同鉱区は南北90キロ、東西50キロの広さがある。1回の調査で石炭が出ても、それが炭層として広がりがあるか分からない。見渡す限りの草原のどの場所に石炭が眠るのか、特定するのは困難だった。

12年も半ばをすぎたころ、鉱区の南端に、石炭層の広がりがあることが分かってきた。集中してボーリングを打った。

天野や萩野谷、そして串間も居ても立っていられず、現地に飛んだ。

集中ボーリングの結果、広がりだけでなく、層に厚みもありそうだった。スクエア社から、「有望」との報告が来た。

「当たったのか」。天野は心底ほっとした。

「2回目で当たっちゃたんですか。ついてますね」。萩野谷はこう思った。

だが、ヤマの本当の価値を判断するには、石炭層の分布など埋蔵状態を調べ、掘り出せる場所を確定する必要がある。

「ここからは地質屋の腕の見せどころだ」

三井松島産業には、炭層など地質に詳しい「地質屋」や、採炭機材や掘り方に通じた「採鉱屋」らのエンジニアがいる。

技術者は腕まくりして、スクエア社から上がってくる調査報告書を待ち構えた。書類に書き込まれたデータから、炭層の分布や厚み、傾斜を分析した。

石炭は品質によって用途も異なる。発電に使われる一般炭、製鉄に使われる原料炭など、用途が違えば販売価格も異なってくる。

経営陣は、地質屋の報告を元に、さらなるボーリングを含め、詳細な調査にゴーサインを出した。

石炭の性状を分析した結果、火力発電向けの一般炭だと判明した。一般炭は東アジアをはじめ、新興国で需要が伸びる。しかもミモザ鉱区は積み出し港から近く、競争力のある炭鉱開発ができると期待された。

資源量は鉱区の南端だけで1億5400万トンと推定された。日本の年間輸入量に匹敵する。

報告を聞いた串間はまた、ニヤリと笑った。「いいプロジェクトを発掘したな」

この事業に、国も注目した。16年5月、炭層のより詳細な調査を目的に、三井松島産業の子会社と経済産業省所管の独立行政法人「石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）」が契約を結んだ。JOGMECは2年間で、総額200万豪ドル（約1億6千万円）の探査費用を負担する。

炭鉱開発は、優良な石炭層さえあればよい、というものではない。

開発から数十年にわたる操業期間中の採算を考えなければ、事業として成立しない。石炭価格の下落や、インフレによる操業コストアップなど、さまざまなリスク要因を考慮して、判断する必要がある。

ミモザ鉱区の操業開始にはさらに、5年かかるか10年かかるか分からない。

それでも天野と萩野谷が、居酒屋で酌み交わせば、必ずプロジェクトの話になる。

「炭層の厚みは今はまだ南端だけだが、北の方を調べればもっと、出て来るかもしれないな」

「早く、結果がでませんかね」

資源小国の日本は、長期的な視点で炭鉱の探査・開発を進めなければいけない。天野は確信する。

「今後さらに、各国で需要が高まったときに、日本に資源がなくなるかもしれない。われわれが石炭を日本に持って行くんだ。安定して供給できる態勢を今のうちに築こう」（敬称略）

出典：産経新聞 2016.7.6